

「ヨハネ 愛の人」

2014年06月01日

ヨハネは、ガリラヤ湖の漁師であったゼベダイ家の息子で、ヤコブの弟です。彼は、主イエスの12弟子たちの中で、最も若かったと思われます。兄・ヤコブと共に主イエスから「ボアネルゲス（雷の子ら）」というあだ名を付けられています。彼は気が短く、激高するタイプだったようです。12弟子たちは二人一組になって、神の国の宣教に遣わされました。その宣教は神の権能を受け、力強い進展がありました。ヨハネは宣教から帰ってきて、主イエスに興奮して報告します。「先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちに従わないので、やめさせようと思いました」。仲間でないので「止めろ」と叱り、宣教活動を止めさせましたと、報告しています。ヨハネは、主イエスを尊敬し、愛し、弟子であることを誇りにしていました。その師の名を使うことに我慢できなかったのです。自分の意に反することには激高して怒る、心の狭さを露呈しています。主イエスから「やめさせてはならない。わたしの名を使って奇跡を行い、そのすぐ後で、わたしの悪口は言えまい。わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方なのである。やめさせてはならない」とたしなめられています。

ヨハネ福音書には「イエスの愛しておられた弟子」「もう一人の弟子」と名前を伏せた弟子がしばしば登場しています。この「イエスの愛しておられた」「もう一人の」弟子はヨハネでしょう。ヨハネは、ヨハネ福音書の中で重要な位置を占めています。

最後の晩餐の席上、ヨハネは主イエスの胸もとに寄りかかっていたと書かれています。当時の食事は、体を横にし、足を投げ出してしますので、胸に寄りかかる状態になるのです。ヨハネは、主イエスから愛され、すぐ傍にいて、主イエスの息づかいを身近に感じていました。その近さが、主イエスは「愛」を説き「愛」を生きるように教えていることを、ヨハネに知らせていったのです。すぐに激怒し、仲間でない者を排除するヨハネは、主イエスの愛に倣う者に変えられていったのです。

主イエスは苦しい十字架の上から、母・マリアとヨハネを見ます。母・マリアに「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」、そしてヨハネに対し「見なさい。あなたの母です」と言っています。主イエスは、息子の無残な死を悲しみ、嘆く母の世話をヨハネに依頼しています。主イエスにはヤコブなど、兄弟たちがいましたが、弟子のヨハネに母を託しています。愛を知るヨハネを信頼したからです。ヨハネ福音書19章27節の後半に「そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引きとった」と書いています。

ヨハネ福音書21章の後世加筆したところに、ペトロについて「どのような死に方で、神の栄光を現すかを示そう」と書かれ、十字架で殉教したことを暗示しています。ヨハネについては「彼は死なないと言われたのではない」と長寿を暗示して書かれています。他の弟子たちは、ネロ皇帝の迫害時代に殉教したと伝えられています。長寿を全うしたヨハネはエフェソ教会の牧師になり、年老いて立てなくなった時、教会員から、椅子に座ったまま、講壇に担ぎ上げられました。ヨハネは会衆を見渡し、一言「互いに愛し合いなさい」と語りました。それを聞いて会衆は大満足しました。ヨハネは主イエスの愛に倣い、愛を語る牧師として平安な晩年を過ごしたと伝えられています。